

平成18年第10回公開文化学術講演会 講演要録

「世界銀行での経歴を振り返って」
～貧困と地域紛争解決の為に～

伊 地 知 重 孝

(千原学長) 今日はここにも掲げてありますとおり、元世界銀行で活躍された伊地知先生をお招きしています。私も含めて、ふだんお伺いしようと思ってもできない極めて世界規模の、ワールドワイドなお話をしていただけると伺っています。

私が生まれたのは昭和22年です。昭和20(1945)年に第二次世界大戦が終わりました。日本はボロボロです。勝った国もある意味ではボロボロです。イギリスはドイツからロケット攻撃を受けて、勝った国とはいえボロボロになりました。日本、ドイツ、イタリアは敗戦国です。負けた国の惨めさは、たまったものではありません。

そのあと、この地球、この世界を何とかしないといけない、世界の格差をなくしましょうということで、世界銀行というものが立ち上げられました。同じく IMF(国際通貨基金)というものも立ち上げられました。

世界銀行は、世界において勝った国、負けた国ということを除いて、何とかしてみんなが平和に暮らせるように、格差をなくせるようにという趣旨で作られた銀行です。伊地知先生はその世界銀行で、貧困にあえいでいる国を何とかして助けましょうということで、特にアフリカ、中国で頑張られたと伺っています。

その中で、日本で言うとブヨ、私は関西ですのでプトと言っていますが、小さい蠅みたいな虫がいます。私は何回噛まれたか分かりません。中学生くらいのところに海水浴に行くとっても、川へ泳ぎに行きます。そうするとブヨやアブが飛んでいます。刺されたらボンポボンに腫れます。これがこれだけ恐ろしい病気を媒介する虫だということは、私は先生の経歴や今までお仕事をされている内容を見て、初めて知りました。

このブヨが人間を刺して、中で卵を産む。フィラリアという卵です。それが体中を巡って失明するということも書かれていました。私の叔父、母親の兄ですが、戦争に行ってブーゲンビルというところで終戦を迎えました。インドネシアの東のほう、赤道直下のところなんです。そこで終戦を迎えて、1年か2年たって帰ってきましたが、毎年毎年、5月から6月にかけて蚊が媒介したマラリアが出てきます。1週間、寒い寒いと、ふとんを5~6枚かけて寝ていましたが、1週間たつと、パッと治るのです。また次の年の5月か6月になると、寒い寒いと。おじさん、何で寒いのかというと、マラリアにかかっているからで、治らないといえます。それがふとんを掛けて寒さが治ればいいですが、フィラリアは体内を巡り、最悪の場合、失明するのだそうです。それをどうして撲滅すればいいのか。

昨日も伊地知先生にお話をうかがっていましたが、最初のうちは、とりあえず貧困にあえいでいる、あるいは格差をなくす、そういう弊害を取り除くことに一生懸命になっていた。けれども、それがある程度国に定着すれば、その次にどうすればいいのか。いわゆるメンテナンスです。確かに、世界銀行はそういう意味合いで、撲滅しようという努力はしますが、ではそういう制度を取り入れて、そのときは一生懸命頑張ってやってくれるかと思うと、政権、政府、制度が変わったりします。あるいは、その国の実状に合わせた形に定着させなければいけません。どうすればいいのか。

伊地知先生は上智大学法学部をお出になっていますが、そういう経済的な観点だけで貧困撲滅ということを考えるのは難しい。では、どうしようと考えられたとき、世界銀行を定年退職されたあと、これではだめだ、もう少し政治というものを知らなければだめだということで、なんと6年ほど前に、また大学院に入られたそうです。相当お年だと思えます。ものすごくしんどかったと言っておられました。大学院に入り直して、もう一度若い人と勉強されました。「こんなに年をとって勉強するのは知力じゃないですね。体力です」と言っておられました。私もそうだと思います。いかに自分が、このことに対して貢献しようと思うか。その気持ちから、おそらく60歳を過ぎてからだと思いますが、もう一度、大学院に入り直して勉強しようという熱意を持たれたのです。自分の持っておられる使命をいかにして貫徹するか、遂行するか。ある意味では信念の塊のかただと思います。

ただ、残念なのが、金沢に来られたのがこれで2回めだそうです。伊地知先生、今晩は何をお食べになるのですかと聞きましたら、フランス料理をお食べになるとおっしゃるのです。いや、ちょっと待ってください、金沢は日本でいちばんお魚のおいしいところです、特にカンパチやブリがおいしくなりますと言ったのですが、さあ、昨日は何をお食べになったのでしょうか。あとで伺ってみたいと思うところです。

いずれにしても、世界で日本人がこのように頑張っておられて、そのお話の一端でも伺えるわけですから、静粛に聞いていただきたいと思います。先生、よろしくお願いします。

(伊地知) 皆様おはようございます。ご紹介いただきました伊地知重孝と申します。大変りっぱな人間のように紹介していただいたのですが、普通の人間ですのでよろしくお願いします。

私は若い女性の大学で講演する機会がありますが、ほかの大学なりほかの組織と比べると、本当にお世辞ではなく、やりがいがあるに非常にあります。あとでお話ししますが、私は世界銀行を2000年の末に定年退職して、そのあと、協賛という形で低開発国の仕事をしていますが、やはり女性問題はこれからの世界でいちばん大事な問題の一つではないかなと思います。環境問題や女性問題です。

世界を見回してみると、女性の地位の低さに非常にショックを受けられると思います。日本ですら大変問題になっていると思いますが、そんなものではありません。奴隷のように女性を扱っている国が多いです。ですから皆さん、国際的な分野で活躍するという夢をお持ちになって、女性の仕事を助ける、あるいはその地位の向上のために自分はやるのだという目標を起こしていただけるように、この話をさせていただきたいと思います。

今、第二次世界大戦の話が出ましたが、私は1939年、東京生まれの東京育ちです。1945年3月10日、有名な東京大空襲がありましたが、夜の3時間ぐらいの間に大体8万人ぐらいが被災して、東京の下町が全部火の海になりました。隅田川には死体がざっと浮いて、死体の山を築いて、その間を逃げた覚えがあります。その中に竜巻のようなものが起こっ

ているのですが、どうして逃げられたのかいまだに覚えていません。今で言う PTSD なのでしょうか、ぽかっと記憶が抜けてしまって、火の海を逃げてひどい思いをしたのは覚えているのですが、祖母に連れられて、恐らく祖母だけでは逃げられなかったと思いますから、だれかに連れられて助けてもらったと思いますが、どうやって逃げたのか記憶が全然なくなっています。

話は飛びますが、私はワシントン DC に住んでいます。2001年9月11日、ニューヨークのツインタワーがやられたとき、ワシントンもやられました。ペンタゴンのビルに飛行機が突っ込んで、百何人かが死にました。私の家のすぐそばでしたから、ちょうど出張から帰って寝ていたのですが、大きな音がして、何だというので朝テレビをつけてみると、どこかの映画をやっているのだと思いました。救急車やサイレンがうるさいとは思っていたのですが、ひょいと窓の外を見たら、大きな煙が上がっていました。ペンタゴンがやられたということで、私は方角からいうと国会議事堂がやられたのだと思ったのです。いちばんねらいやすいからです。ペンタゴンは非常に頑丈な建物ですから、あんなところをねらってもしょうがないだろうと思ったのですが、そこに突っ込んだのです。

4日くらいたってから、たまたまペンタゴンのそばを車で通ったのですが、風が変なおいがしていました。どこかでおったことがあるなと思ったら、子供のころにかいだ死体のにおいと同じでした。やはり人間は子供のころの思い出というか、ショックが記憶として随分残るものだなと思いました。

それから、1968年に私はイスラエルのキブツで働いていたのですが、ちょうどレバノンとの国境のそばでしたから、よく機関銃で撃ち合っている音が聞こえました。ですから、世界は変わらない。いまだに危険です。

私の上司だった人に、世界銀行の総裁を13年間やったロバート・マクナマラという大変頭のいい人がいました。その人はベトナム戦争を指揮した人ですが、1968年に国防長官を辞任してから、これからは世界銀行で平和のために尽くしたいということで、大変平和という事を考え続けた人です。人柄も非常にいい人で、アメリカではベトナム戦争で5万人も戦死して、その親のほうの恨みは続いていましたし、それを彼は自覚していました。彼が言っていたのは、「これからいちばん危ないのは、あなたがたが将来母親になったとして、いちばん覚えておいてほしいことは、こういうことだ。地域戦争で人が殺されたり、国家に傷がついたり、あるいはアフガニスタンのように国が占領されてどうにもならなくなったり、女性が職業に就くのも教育を受けるのも禁じられたり、ひどい状態が続くかもしれないが、国家が減びるということはなかなかない。軍隊が間違いを起こして人を何十人、何百人も殺したり、あるいは虐待したりということはあるかもしれないけれど、国家が減びるというのは、なかなかやれるものではない。ただし、核戦争を始めると一発で国家が減びる」、とよく言っていました

最近、彼は2004年、85歳の時にドキュメンタリー映画に出て、切々と平和を訴えてアカ

デミー賞をもらいました。その内容は、皆さん、キューバ危機というのを聞いたことがありますか。キューバン・クライシス、随分昔の話ですが、1960年にケネディ政権ができて、61年にキューバ危機が発生しました。

キューバ危機とは何かというと、あのころは東西の冷戦がピークの時で、アメリカのど元のキューバに共産主義国家ができたというので、大変アメリカ人は危機感を持っていたのです。そこへソ連の船がミサイルを持ち込んだのです。アメリカのど元ですから、ミサイルに核弾頭をつけて撃ち込まれたら、東半分はいっぺんでだめになる、大危機だということで、マクナマラは国防長官としてその解決に心血を注いだわけです。

結局、核弾頭を積んだ船がソ連から近寄ってきましたが、キューバ沖一帯を海上封鎖して、封鎖を突破したらすぐに攻撃に移るという準備をしていたのです。ソ連のフルシチョフ首相は、これは危ないということでその船を引き返させます。キューバ危機が直前で回避されたという有名な事件ですが、大体1週間くらいかかりました。そのときに世界は、私も含めて、もう物心ついていましたから、大変なことになった、戦争になって、第二次世界大戦の繰り返しどころではないと非常な恐怖心を持ちました。

1993年、30年以上たってからですが、マクナマラが、もうおじいさんになっていますがカストロを訪ねて行って、あの1961年の危機の時に、もし核弾頭が入っているミサイルをソ連が持ち込んだということが分かっていたら、あなたはアメリカに向けて発射せよという命令を出したでしょうかと聞きました。核弾頭があるかないか知っていたのか。それから、もしアメリカに向けて撃てば、当然我々は反撃するから、キューバは全部やられてしまう。あなた自身も含めて全滅しなければいけない。こういうことは分かっていたかと聞きました。

そうしたらカストロは、「何ばかなことを言っているのだ。核弾頭があるかないかということではなくて、核弾頭は既に190発あったのだ。おまえたちはCIAやFBIを全部動員しても、そんなことは分からなかったのか。核弾頭をつけたミサイルをアメリカに向かって撃つか撃たないかという命令を出したかなどという質問はナンセンスだ。俺はすでに撃てという命令は出していた。その結果どうなるか。自分を含めて全滅になることは分かっていた。しかし、それが主義に生きる大統領の職務だ」ということを言ったそうです。マクナマラは涙を流しながら、「核戦争というのはこれだけの違いがある。人類の危機はお金や理屈で解決したのではなかった。ただ運が良かっただけなのだ」と言っていました。

世界には、いまだにソ連も含めて核弾頭が7500発あります。これからは危機の世界に我々は生きていかなければいけないのだということを日々認識されながら、人間の安全保障ということを常に頭に入れておく必要があると思います。

人間の安全保障において、日本政府がODA、政府開発援助を進めていることは非常にいいことだと思います。日本のほかにはカナダが一生懸命やっています。どのように違うかというと、物理的な保障、例えば核拡散防止条約などの物理的な防衛とは別に、例えば

女の子の教育を最初から支援する。そうすると母親になったときに、きちんとした家庭ができます。あるいは平和に貢献できます。男はすぐに戦争を始めたがりますが。そういうことで、ソフトな面での安全保障も、これから大きく考えていかなければなりません。

その7500発の核弾頭はほうほうに散らばっています。主にアメリカとロシアにあります。少しずつコントロールして、だんだん数を少なくしていくようにしようというのが人間の安全保障の主要な課題です。ですから将来、世界にお出になって、世界の貧しさと戦いながら、女性の地位の向上とよりよい人間社会を作っていくために努力していただきたいと思います。

私が勤めていた世界銀行というのは、大変面白いところです。私が入ったときには、職員が3,000人くらいいて、そのうち日本人は8人でした。その8人のうち1人に入ったのですが、大変でした。その当時、1972年、日本はまだ低開発国の一つくらいにしか思われていませんでしたし、低開発国の人間から見ると、ヨーロッパやアメリカにおべっかを使っている国とされていました。

どうしてそういうことになったかというと、やはり第二次世界大戦で、今、先生がおっしゃっていた戦争経験から生じるものです。朝、学校に行ってみると、防空壕に直撃弾が落ちて、一家全滅した級友の名前が読み上げられたりしました。ですから、いまだに小学校時代の同窓会は団結が強いです。40人くらいのクラスで、4人爆弾で死んでいます。あと1人、焼夷弾の火を全身にあびて生き残り頭がおかしくなったのがいます。そういうのを見ていましたから、何とか世界の平和に役立ちたいという使命感を最初から持っていました。幸い子供のころ割と成績がよかったものですから、一生懸命勉強して、イギリスのオックスフォード大学へ行って経済を勉強し、世界銀行に30年間勤めました。

いろいろな人からインスピレーションを受けました。スウェーデン人で第2代の事務総長、ハマーショルド総長は非常に内省的な教養人で私がああなりたいたと憧れた人です。その人が、当時から中近東、アフリカ問題を大変な問題として自ら現場に飛び込んでいって、一生懸命その解決のために努力しました。1963年にコンゴの内乱解決の為に現場に向かう途中、飛行機事故で亡くなりました。

そのころパレスチナ問題を審議していた安全保障理事会で傍聴席にいたパレスチナ人達が抗議騒動を起こしたのです。大声を出したり、ビラを配ったり、大騒ぎになったのです。それまでは、国連というのは非常に平和的な機関で、静かに平和を議論するところだったのですが、安全保障理事会の歴史上初めて議事が中断してしまいました。そのときに、「ライフ」という雑誌の記者が、呆然と立ち尽してその騒ぎをみつめている安全保障理事会のメンバーの人たちのカットを撮って、その写真が「ライフ」に大きく出ました。そのときに、真ん中に一つ席が空いていて、解説には「この空席はハマーショルド事務総長の席だ。彼は何をされるか分からないにも拘わらず、傍聴席に飛び込んでいって、騒ぎを止めようとした」と。

私はそれを見て、子供心にああいう人間になりたいと思ったのです。彼の死後、生涯、修道僧のように独身をとおした人らしい内省的な日記が発見されました。日本語で『道標』という題でみずす書房から出ていますから、図書館で探してお読みになっていただきたいと思います。私はこの人の本を何度読んだか分かりません。

そのほかに刺激を受けたのはテレビです。ケネディ大統領の就任演説で、「国家がいろいろなことをやってくれるということを期待しないで、自分が国家に対してどんなことができるか考えなさい」と言いました。大変有名な演説ですが、それにも大変刺激されて、先づ留学を目指したのもその為です。

国連は最近、あまり評判がよくありません。何を決定するにも時間はかかるし、力もあまりない、金もあまり持っていない。ただ、コフィー・アナンという今の事務総長は10年めですから、第2期で来年退任します。ガーナ人で、大変温厚なかたです。しかも、国連のいちばん下からたたき上げた人ですから、国連の裏表をよく知っています。非常に有能な人です。彼は第1期めは静かにしていましたが、2期めになってから低開発国の意見、あるいは弱い者、女性、あるいはエイズで苦しんでいる人たちの意見などを代弁して、声を高くして、アメリカやEU、日本に向かって、もっとお金を出して対策を講じろということ言うものですから、アメリカなどからはちょっと嫌われています。ただ、国連の職員は「いいぞ!」ということで士気が上っています。

私も出張でワシントンからニューヨークまで何度も行きましたが、国連は最初のころは官僚的すぎて、いい感じがしませんでした。しかし今は随分変わりました。やはりトップの人がしっかりしていると、下の人はずいぶん変わります。ですから、コフィー・アナンが来年退任するのは、私はちょっと残念なのです。例えば国連の開発計画、UNDPにも日本人が何人かいます。日本人のいちばん上の一人が女性です。福田さんという人ですが、非常にいい仕事をされて、経済学者ですが、「人間の開発レポート」で Human Development Index（人間開発指標）を発明されたかたです。非常にいいお仕事をされています。

日本人の女性は、海外に出られると、日本の男性よりしっかりしていると思います。お世辞ではありませんが、私の経験では、どうも単身赴任などで政府から派遣されてくる男性は、円形脱毛症になったりノイローゼになったりする人が必ず出てくるのですが、女性は日本に帰ると行くところがないというので、ものすごく一生懸命仕事をします。ですから、世界銀行に今は120人くらいの日本人がいますが、半分以上は女性です。副総裁の一人も、最近退任しましたが日本人です。日本女性は国際機関では評判はいいのです。一生懸命、英語を勉強されています。国際機関に勤めるためには、世界銀行も含めて、終始、最低英語がかわります。英語ができないといけませんから、留学先で一生懸命、国際的な経験をお積みになって、英語が話せる日本女性に多く出てきていただきたいと思います。

世界銀行に勤めていると、なかなか歯がゆいのです。女性は家庭に入ってしまったたり、男性についていくだけという仕事が意外に多いものですから、世界に留学されて、そこか

ら国際機関に入って頑張ろうという女性は、数は少ないですが頑張っておられます。評判もいいですから、どうぞそういうところを目指していただきたいと思います。

世銀の職員は、非常にやはり後進国相手ですから、先ほどのオンコセルカ病などはいいい例で、あれはブヨの幼虫が体中を回るのです。象皮病というのをご存じですか。足がこんなに膨らむものです。前に映画で「エレファントマン」というのがありました。昔の映画ですが、顔がおかしくなって、しかし、心はいいという映画でした。あれもオンコセルカ病の一種です。最後にほうほう体を食い破って、目を食い破って虫が出てくるという病気で、ボルタ川というアフリカの川の沿岸に多い病気です。ただ、川のそばですから、肥沃な土地が多いのです。そこの農民がみんなやられて逃げたものですから、そこに世界銀行が行って、農業の生産性を上げるためにはオンコセルカ病を何とかしなくてはならないということで、我々自身が契約をしたわけです。

この病気の原因は実は日本の医者が見つけたのです。最初、中南米に行ったときに見つけて、たどってみたらアフリカの奴隷が持ってきたということだったのです。アフリカ西海岸というか、ガーナや象牙海岸にはびこっていて、撲滅するための薬を見つけたのも日本の会社なのですが、残念ながら金にならないというので、薬の生産をストップしてしまったのです。

ただ、日本政府は75年くらいから随分お金を出しています。私もこの仕事にかかわらせてもらい日本政府に必要な資金を出してもらうよう何人かお願いに行きました。さいわい病気そのものは殆ど撲滅されました。ただ、潜伏期間はエイズと同じで二十何年ありますから、昔食われた人がまだ発病しますが、今食われた人は発病しないというところまでになっています。非常に成功した例だと思います。WHO と世界銀行と日本政府、あとアフリカの関係者が協力してやりました。

このときには、随分多くのアメリカ人が活躍しました。ボルタ川の上流のブヨの多い場所は非常に狭い所なものですから、難しいヘリコプターの技術が必要でした。アメリカのベトナム戦争のベテラン連中に頼んだのです。みんなボランティアです。お金は一銭もかかりませんでした。川の狭い所で危険を冒して薬をまいてくれました。

世界銀行というのはいろいろな人道的な援助の仕事をやっていますから、あまりそういうことの銅像などはたてないのですが、オンコセルカに関しては少し世銀のほうも動きました。アフリカの中年の盲目の男性が、子供に木の棒で手を引かれている銅像が世銀の中庭におかれています。

この仕事に携った WHO の医者の中には日本の女性の医者もいました。アフリカのとてもない所で、「私はコップ1杯の水で体を洗っているのだ」と言っていました。アフリカの奥地まで行って、シュバイツァー博士のように一生懸命やっていました。ですから皆さん方も、どうぞ夢を持って世界に飛び出して、考えられないような貧しさというのがありますから、貧しい人の役に幾らかでも立つように、一生懸命勉強していただきたいと

思います。

やはり、日本人の女性は優しいです。パレスチナのガザという所から少し離れた所ですが、エジプトとの境にある小さい所で、保健婦をなさっている日本の女性に会いました。日本政府はパレスチナに対して相当大きな援助をやっています。私が初めてパレスチナに行ったときには、仕事は大変面白かったです。私は1997年に初めてガザに行ったのですが、ちょうど終戦直後の東京のようでした。どぶのにおいはひどいし、水道の水は出っぱなしだし、子供は裸だし。ですから、同情心から一生懸命仕事をしていました。

何が問題かというと、みんな自暴自棄になっているのです。特に女性の場合は、パレスチナは割といいほうなのですが、それでもイスラムの世界は、女性に対する差別はどうにもならないのです。女性の絶望感。小さい所に閉じ込められ、それこそ3 km×8 km くらいの所に100万くらいの人が住んでいます。そういう所で毎日、食料を調達しなければいけない、水は調達しなければいけない、ましてや自分たちの将来、教育の機会などない。父親や夫や恋人がゲリラ活動をし、それに関係して殺される。そうになると、やはり女性の精神病が多いのです。そういう所で日本の女性が頑張っています。

日本は戦後、ニコヨンと言って、240円で道路の穴ぼこを埋めたり、そういう最低の職業というか仕事をやった経験がありますから、ああいう所で道路を整備したり、掃いたり、公園を整備したりということで、日本の援助のお金をまきました。そうやって、いちばん底辺の人たちを助けていますから、大変評判がいいです。日本は、終戦直後のひどい食糧難など、ひどい状態を経験していますから、日本人はそういうものがDNAの中に入っていると思いますから、頑張ってくださいと思います。まだまだ世界は貧しいですから、女性として助けられる機会は非常に大きいです。

世界銀行の地域紛争へのかかわりの典型的な例が、今申し上げた中近東の平和に関するものです。これは私が世界銀行の経験の中でいちばん面白かったし、一生に一度の経験でした。アラファトやラビン首相など、聞いたことがありますか。ノーベル平和賞をもらいました。私どもは経済機関ですから、政治のほうでは何もできないのですが、お金の面でサポートする仕事をやっていました。

いちばん印象に残ったのは、アメリカが中心になっていますから、ホワイトハウスでクリントンのグループと一緒に仕事をやったことです。クリントンは女性問題を起こしたりして評判がよくなかったのですが、一緒に仕事をしてみると、非常に人柄もいいし、大変記憶力のいい人です。また問題を把握するのもうまく、頭がいい人です。側で見ると、背が高く、本当にきれいな人です。真っ青な目をして、アジア人の私から見ると、とても印象的な人です。まだ若いですから、大統領を辞めても中東平和交渉を一生懸命やっています。

アラファトには何度か会いましたが、なかなか難しい人です。やはりゲリラの戦士で戦って有名になった人ですから、平和になるとやり方が分からないのでしょうか。ですから、

平和時のリーダーとしては若干問題があったと私は思っています。一説によると、和平協定ができ上がると自分の地位が危ないから内乱を起こしたということを言う人もいますが、それは言い過ぎだと思います。

一方、ラビン首相は、イスラエルの歴戦の勇士でレバノン侵攻の指揮官でしたから、私は当初好きな人ではなかったのです。しかしそれだけひどい戦争を経験していますから、平和に関してよく知っている人でした。ホワイトハウスで和平協定のサインをしたときには、彼の演説は本当に感動的でした。もうごめんだと。enough is enough、もうとにかく戦争は絶対にやらない、自分の子供や自分の孫をこんな目にさらすのは二度とやりたくない、と、絞り出すように言いました。テレビなどでも相当反応がありました。それ以来、頑固なまでに和平協定の実現に力を入れました。彼は世界銀行のミッションも行っており、いろいろ話し合いましたが、とにかく成功させなければいけないと。今も自分は脅迫をされているし、この協定に命をかけてやったので、何とか早く双方で、この協定を生かしていないといけない。あれほど戦争でやり合ったパレスチナ側にもっとお金を投入して、早く生活費を上げてもらいたい、そうしないとこの和平協定が崩れると必死に運動していました。

ちょうど閣議が始まる直前に彼と会ったのですが、閣議に入ると大臣はみんな小さい閣議室に入ります。目が真っ黒になって、疲れ切った顔で、「とにかく、時間がない、早くやらないとまた崩れる。今度崩れたら、自分は押さえる自信がないのだ」と。それが数週間たって暗殺されてしまったのです。やはり心配されていたとおり、右翼です。

ですから、平和を追求することはそんなに生やさしいことではないし、貧しい人を助けましょうという甘い気持ちでいくと、そんなものではありません。世界銀行の仕事でも、私はイエメンの仕事もアフガニスタンの仕事もやりましたが、護衛がなかったら危ないです。アフガニスタンでは女の子のための学校を建てますので、僻地まで行かないといけないのですが、その途中でねらわれる可能性が非常に高いです。タリバンは連中は、安定していると困るわけですから、安定に寄与するために来た日本人や世界銀行の連中をねらい撃ちするわけです。

私は2000年の暮れに退任して、そのあとアフガニスタンとイエメン、いちばん貧しい国で仕事をしていますが、世界銀行のミッションで行ったときは政府が護衛をつけてくれましたが、今はつけてくれないですから、それこそ護衛を雇って自分でピストルを持っています。自分で身を守りながら、学校の建設候補地に行ったりしています。人助けというのはそんなに甘いものではありません。世界は非常に危なくなっています。以前より危なくなっている気がします。

今、日本のテレビを見てみると、アフガニスタンはシルクロードの真中で、砂漠のきれいなロマンチックな絵が出ていますが、今はあんな危ない国はないです。私はあそこの女子教育のプロジェクトをやっています。タリバンが女の子の教育、あるいは女性が職業

に就くことを6年間禁止しましたから、今、女性の小学校1年生は、いちばん若くて13歳半です。7歳プラス6歳半ですから、いちばん若くて13歳半。小学校1年生のABCの勉強をやっている中で、クラスに行ったときにいちばん上が25歳でした。幸いなことに、日本政府もそういうところに一生懸命お金を出してくれますから、学用品などいろいろなものを持っていけます。学校の黒板なども寄附しながら、三交替でやります。午前中、午後、それから夜はおばさんたちが来ます。ですから、そういう人たちの教育のために今やっていますが、努力している女性の教師が女性の教育をしているということでねられます。本当に大げさではありません。

ですから、我々は自分なりの使命感という事で。いちばん強く申し上げたかったのは、人を助けたいというのは、やはり人間の基本的な本能だと思います。いちばん難しい所に行っても、やはりだれか人助けをしたいという気持は必ず出てきます。恐らくあなたがたも19歳、20歳で、どこかでそれがあるはずです。やはり人間というのは、子供を育てたり仕事に追われたりという多くの中で忘れがちにはなるでしょうが、どこかで人助けをやりたいと思っている。その本能を満足させる職業に就くのは大変面白いと思います。自己満足というか。そんなに人を助けるという機会はないですから、私もそういう魔術に引かかって、いまだにそんなことをやっています。

アフガニстанは、女性だけでなく、昔からものすごく貧しい国、最低の国の一つです。1年ほど前に、旱魃でひどい食糧難の続いた田舎の道路端で餓死者を見かけました。政府の権威も及んでいないような田舎でした。私は30年間世銀に勤めていて、いろいろ貧しい国に行きましたが、餓死した人の死体を見たのは初めてです。若いきれいな女の人が道端に2人。子供がそばで座っていました。実はまだわずかに息はありました。私はジープに乗っていて、ほうっておくとあと1時間ぐらいで死ぬだろうなど。車に乗せて、病院に着くまでに死んでしまう。私は食料とお金を持っていましたが、それを与えると殺されて取られてしまうと周りの人に言われ、ほうっておきました。それほど世界は厳しいです。かわいそうだから何かしようとなんとすると、逆にけんかになって、人が余計に死ぬこともあるのです。

今、私が一生懸命やっているのは、水や薪を探すというのは女の人の仕事で、例えばイエメンでは村や町などは山の上にあることが多いのですが、そうすると女の人は山の上から下りて、下の川で水をくんで上に持っていく。町へ着かないうちに、途中から落ちて死んでしまったら、残された子供が途端に餓死状態になるという厳しい所です。ですから、私がやっているのは、山の途中に女子の中学校を造って、太陽は幾らでもありますから、そこまで太陽光発電の力で水を持ってきます。そうするとトイレがきれいになって、衛生状態がよくなります。それから理科教育で水が使えるようになります。そして、授業が終わったあと、水を持って自分の家に帰れますから、お母さんが馬車馬のように使われたりしなくて済みます。太陽光発電は日本では非常に技術が発達しています。京セラやシャー

プなどいろいろありますから、そういうところの機材をもらって、井戸水をくみ上げるプロジェクトとか、無線の電話を山側の村に幾つか置いておいて、緊急のときに使えるように近くの保健所や病院につなげるようにしておくプロジェクトをたちあげています。

アフガニスタンでは、女性は今、子供を産むときに、4人に1人死んでいるのです。それから、赤ん坊は5歳まで生きる率は全体の50%ないのです。ですから、そういう人たちがお産の途中で死なないように、緊急の電話を設置したり、太陽光発電ができるようなプロジェクトをやったりしています。

こういうことは立身出世の気持ちがあつたらできないです。やはりボランティアの精神や、小さいころからの人を助けなければならないという気持ちを大事にしながらやっていただかないといけません。そのかわり、面白いです。人助けするというのは気持ちがいいです。しかも、何度も申し上げているように、女性でなければできない仕事は幾らでもあります。我々には、顔を隠した女性というのは、中近東の女性にしてもアフリカの女性にしても、用心してあまり受け入れてくれないのですが、1人女性を連れていくと、安心していろいろな話をしてくれるし、プロジェクトもやりやすくなります。ぜひ、世界に飛び立つために一生懸命、英語を勉強して、経済学を勉強して、世界を目指していただきたいと思います。

日本の場合は、まだ世界の情勢から孤立した国です。例えばイランやイラクの場合、どうして8年間も隣同士でけんかをやらなければいけないかというと、やはり民族が違います。ご承知かと思いますが、イランはアーリア系でアラブ人ではありません。イラクはアラブ人で、宗教も違うのです。同じイスラム教でも、中では違う教えがありますから、そういうことも理解しないといけません。

ただ、私が今まで中近東で仕事をしていちばん優秀だと思ったのは、イラン人、イラク人です。あれだけばかな戦争をやっているからどうにもならない国かと思うと、そうではないのです。あそこは環境問題、環境の技術などはすごく研究されています。例えば、イランの場合、カスピ海ではキャビアが獲れます。今は乱獲してほとんどなくなっていますが、イランの海岸だけは非常にきちんとしています。あそこで働いているイランの技術者は、カスピ海沿岸に6か国ありますが、私がいろいろ仕事をやって、中近東で一生懸命、政府の大蔵省やエネルギー省を相手に仕事をしたときに、いちばん実力があり、しっかりしていたのはイラン政府の役人です。ですから、砂漠の真ん中であんな格好をして女性を虐げているのは確かですが、そういう違いをいろいろ知りながら、プロジェクトを成功させるというのは、やりがいもあるし、楽しいです。

もう一つ、世界の親に共通しているのは、アフリカの僻地だろうがインドの僻地だろうが、やはり子供を教育したいという親の気持ちです。その気持ちは世界のどこでも通じます。あとは英語でプロジェクトを立ち上げる実力をつけ、一生懸命、教育の重要性を途上国側が更に認識し援助国側につなげる手助けが出来るよう努力するのです。

1997年に世界銀行は『東アジアの奇跡』という本を出しましたが、特に日本が一つの大きなお手本として引用されました。1945年8月15日に戦争が終わりましたが、この本の為に集めた資料の中に1945年終戦の年の10月の初めに第1回「経済白書」が出ました。そのときに外貨、ドルが全然ないわけです。その少ないドルの半分で何をやったかという、難しい言葉で傾斜生産方式といいますが、一つは鉄鉱石を輸入しました。もう一つは石炭を輸入しました。鉄を作って輸出して外貨を稼ぐということを繰り返しながら、だんだん経済が発展したのです。

ところが、その少ない外貨の残りの多くの部分を日本は何に使ったかという、紙を輸入し、印刷のインクを輸入し、印刷機械はだめになっていますから、それを動かすためのスペアパーツを輸入するために金を使った。そのときの記録に、あと40年たったら絶対元を取ってみせるということを言っていた。ものすごい少ない外貨を、紙や印刷用のインクなどに使うというのは、世界にそんな国はないのです。そして1960年代になって元を取り出しました。『東アジアの奇跡』は1997年に出たものですが、どうぞごらんになってください。

私はその本を読んで非常に感激したのは、だれも反対した者がいないということです。今の小泉さんにいろいろ官僚が反対していますが、こんなひもじい思いをしているときに、インクだの紙だのとおかしいのではないか、食料の輸入が第一だという意見は全く出ていません。ですから、日本は教育にお金を使って復興したということをみんなよく知っています。1945年、みんな飢えて死にかけているときに、30年40年先を視野に入れて当時の政治家はやったわけですから、日本の教育の基礎というのは大変いいと思います。

そのあと、1997年にこの本が出たあと、実は東アジアの危機があったのです。覚えておられると思いますが、タイや韓国、フィリピンなど、いろいろな国がぼしゃったのです。韓国に至っては、世界銀行をいったん卒業したのですが、もう1回、被援助国として返り咲くことになります。私はそのころ、1999年から2000年にかけて、退任の直前でしたが、ジョージタウンのロースクールに入り直して、その中で模擬裁判をやらされました。あの当時、マレーシアのマハティールという大統領は、自分の金融マーケットを閉めていたのですが、あらゆる経済理論から言って、そんなことをやるのはおかしいとクラスの皆が言っていました。私は彼は正しいと言い通しました。ほかのアメリカ人で、普通の経済学をやる人はとんでもないということを言ったのですが、1年たってみると、マハティールの方が正しかったのです。マレーシアだけ実害が少なくすんだのです。ですから、自分が正しいと思ったら、暗殺も恐れずということです。

我々のアフガニスタンの担当の責任者は日本人の女性だったのですが、「彼女はいつ殺されてもおかしくない」とほかの人は言っていました。それくらいの覚悟で日本女性は頑張っていますから、どうぞ一生懸命、おやりになっていただきたいと思います。

最後に私が強調したかったのは、環境問題です。環境問題というのは非常に難しいです。

目に見えないですから。1970年代、あるいは80年代の環境問題は、例えば水がなくなってしまうとか水が汚れるとか、どこかで不法投棄でゴミを捨てるとか、よその国に行って原子力廃棄物など要らなくなったものを捨ててくるとか、目に見えたものがあつたのですが、そういうものは大体一国の中でコントロールできるのです。石原都知事がディーゼルのトラックを規制したのと同じように、一国の範囲でできるいろいろなことは今、だんだん各国ともうまくいき始めています。

ところが、グローバル・ウォーミングやオゾンの問題など、ほうっておくとあなたがたの子供の世代に癌がふえるとか、そういった目に見えない国際的な環境問題が今どんどん増えています。何が難しいかというと、今まで一国の中で予算措置を執れば、あるいは議会で法律を通してそれを禁止して予算措置を執れば何とかできたのですが、今度は世界的な規模の環境問題はどんどん増えています。それはPCBやアスベストが体内に蓄積して不妊や癌などをおこすという、目に見えた結果が出ているのに、国際的なことですから、取り決めに結ぶのが非常に難しいのです。

今、モントリオールでやっていますが、ああいうものに幾ら時間をかけても協議が成り立ちません。それから、各国の議会が予算を通さないと、例えば二酸化炭素や原子力等の規制をやろうとしても、インドが入っていない、中国が入っていない、何で自分たちがお金をかけなければいけないのか、やめておこうと。自分の選挙区の支持を得られないということで、非常に難しくなっています。

ところが、難しいで済ませられません。我々の子供や孫の時代に相当の影響が出る具体的な問題が出てきていますから。私は教育だと思います。教育で一般の世論を持ち上げて、少しずつやっていくよりしょうがないと思います。

ジェームズ・ガスターブ・スペースというエール大学の森林学の教授が、UNDPのトップにいました。ものすごく優秀な学者です。ただ、今は環境問題に特化しています。「A red sky in the morning (朝焼けの空)は夕方になると雨が降る」、という素晴らしい本を昨年出版しました。これは世界各国共通の漁師の言い伝えです。今は朝焼けの空なのですが、地球の環境問題は、もう夕方に向かって走り出しているのですから、自分たちがグローバルな考え方をして、もっと世界各国の政府に世論の力で働きかけていかないと、とんでもないことになるということを具体的に書いています。私は英語で読んだのですが、最近、アマゾンで見ていたら日本の訳が出ていますから、ぜひ図書館で探してお読みになってください。

それから、残念ながらこれは英語なのですが、私が大変尊敬しているイギリスの女性裁判官で、刑事裁判の弁護士から最高裁の女性裁判官になったヘレン・ケネディーという人が最近、『Just Law』というベストセラーになった本がありますが、その人が1993年に書いて、2004年に書き直した本で『Eve Was Framed』というこれも素晴らしい本があります。よく冗談で言われますが、女は男のあばら骨からできてきたと。ところが、ああいう言い

伝えは、女ははなからうそをつかれてきたということを示すと彼女は言っているわけです。彼女が弁護した最下層階級の女性たちは、いかにひどい扱いを男から受けているか。男性社会の中でいかに生きていくのか。彼女自身も含めてです。彼女は結婚して2人のお子さんもあって大変成功した女性ですが、いろいろな女性を弁護しながら、いかにひどい法制度なのかとなげいています。これはイギリスですよ。アメリカも含めて、女性というのはいかに損をしているかとおっしゃっています。ですから、我々もタリバンなどに対して何も戦闘的になる必要はないと。少しずつ理屈で説明しながら変えていかなければいけないと言っています。

私の家内は外国人ですが、オックスフォードで知り合って、1971年に大阪万博に来て私と婚約したのですが、そのときに初めて、彼女が海洋生物科学者で割と名の知れた人だということを知りました。ところが、アメリカで生活するようになって、彼女はイギリス人ですから外国人です。アメリカでいかにひどい差別を受けるか。やはりアメリカの男社会の中で、学問で生きていくのに大変な差別を受けました。私の娘も就職していますが、やはり男社会の中で差別を受けています。彼女はバイオリニストですが、オーケストラのオーディションでも、やはり男性が先に取られてしまいます。彼女は非常に優秀だと思いますけれども。

ですから、これから女性が生きていくのがいかに大変か。私は中近東やアフリカの社会で働いてきましたが、日本はいいほうですが、ある意味で大変だということとはよく分かります。ただ、このように女性に立ち上がってもらわないとどうにもならないです。この『Eve was Framed』という本は残念ながら日本語訳になっていないのですが、素晴らしい本です。私は今でも時々、夜読んでいます。素晴らしい本ですから、ぜひどこか図書館で探してお読みになってください。私は女性問題でいろいろな本を読んでいます、これくらい専門的でよく書かれ、しかも理路整然として、感情的にならずに書いてある本はないです。ちょっとそちらの、今おやりになっている項目から少し離れたかもしれませんが、要は日本から発信して、世界に向かってできることはたくさんあります。

もう一つは、女性向けのマイクロ・ファイナンスです。日本では何て言うのでしょうか、無尽のようなものがあるでしょう。地方で女性だけが集まって、毎月幾らか集金して、そのうちの1人が全部を借りて、それで何かをグループでやる。そして毎月幾らかずつ返していく。

例えば、お金を出すと男が使ってしまうから、ヤギ1頭とか、ニワトリを10羽とか、現物で買ってあげてその女性に渡すわけです。そうするとニワトリが産んだ卵を売って現金にして子供の教育に回すとか、自分の下着を買うとか。そういうことで、いいお金の使い方をしますから、マイクロ・ファイナンスは日本の小さい中小企業向けの銀行がよくやっています。ですから、日本で技術を勉強され、日本だけの技術、地方だけの技術が、技術として世界に通じますから、マイクロ・ファイナンスの技術を勉強されて、世界

に向かって飛び出していたきたいと思います。

最後に、先ほどイスラエルのキブツで働いたという話を少ししましたが、原始共産主義というのはすごいです。本当に何でも共有です。お金が要らないのです。食料も協力し、仕事もみんなで分け合っています。例えば、今日は台所で働く係りですが、明日は違うところへいくとか、全部平等です。上下の差別もないし、男女の差別也没有せん。子供は母親から離れています。子供を育てる専門の人が子供の部屋で育てています。そして、夜になると一緒に帰ります。

そういうことで、私は随分理想に燃えて行きました。ただ、イスラエルは相当厳しい状態になっていて、キブツから出る男の子は真っ先に兵隊に取られます。私が行ったのは1968年で、67年の戦闘のすぐあとでしたからそういう状態でした。孤児もものすごく多かったです。あとで聞いてみると、そこから出ている孤児はみんな、心の傷はいちばん少なかったそうです。みんなで保護して育てていました。

ところが、今や世界はものすごく、おかしくなった孤児が多いのです。アフガニスタンの場合は、タリバンが外へ出た女性をねらったふうにして殺したわけですから。ですから、行ってみると、頭のおかしい男の子がものすごく多いです。これから14日にワシントンに帰りますが、最初にやる仕事は、そこに亡命してきたアフガニスタンのお医者さんがいるのですが、精神科の看護婦と精神科の医者が組んでアフガニスタンに行きます。神戸の地震の時に、親を失った子供を治療した精神科の医者が日本にいましたが、その人たちも参加していました。男の子が精神的におかしくなると、爆弾を持って自殺をするなどしますから、そういった仕事をやろうとしています。

ですから、世界にはそういう所が幾らでもありますから、こちらのきれいな恵まれた環境で満足することのないように、一生懸命勉強してください。そのかわりいろいろな面白いことがあります。私なんか、キブツに行ったら最初の仕事は、洗濯屋に回されて、女性の下着を毎日40kg洗っていました。それで干すのもやっていました。ですから面白い経験です。一生懸命勉強してください。

何か質問があったらお受けしたいのですが。途中で質問をお受けしようと思ったのですが、話が面白いし、面白いと言って自分の話ですが、つい最後になりましたが、何かご質問はありますか。

(Q) モンゴルに興味をもっているのですが、モンゴル教育問題に対して何を言いたいと思っていられるのか。教育に対して援助をしたいと・・・。

(伊地知) モンゴルはものすごく大きい国です。人口がたしか250万ちょっとでなかったですか。非常に少ないです。散らばってしまっていますから、教育制度を具体的に普及させるのは難しい国です。ただ、太陽光だけはたくさんありますから、太陽光発電で電気

をつけ、図書館などを充実させ、教室の中に電気をつけるというプロジェクトを世界銀行でやっています。

ですから、エネルギーというのは、石炭、石油からとるとガンを誘発したりして評判が悪いのですが、エネルギーは生活の基本ですから、それを代替エネルギー、太陽光発電、バイオのエネルギーを作るというのは、非常に大事なことだと思います。それから風です。モンゴルは風も多いですから、風力発電などをやっていくことに金を使うことは大変大事なことだと思います。頑張ってください。

(Q) 安藤と申します。私が尊敬する経済学者の1人にスティングリッツという人がいらっしゃいます。クリントン政権の時に本を出しています。彼は最近、『人間を幸福にする経済学』という本を書かれまして、クリントン政権からグローバル化する過程で、スティングリッツ自身も政策を執ってきたことがずっと書かれているのですが、それを反省するような、間違ったことをしてしまったということを書いています。

私なりに世界がグローバル化していく中で、スティングリッツは何を言おうとしているのかを考えました。昔は世界が幸福になるためには、みんなアメリカのようになればいいのだという考え方で、世界のアメリカ化のようなことをしようとしたのではないのでしょうか。しかし、風習も違う、考え方も違う、宗教も違う中で、本当のグローバル化、本当に世界じゅうが幸福になるためにはどうしたらいいかというときに、お互いの価値観の違いや考え方の違いを認め合ったうえで、共通のルールを作ることなのかなと思ったのですが、具体的にはどうやってやっていくのでしょうか。難しいことだなと思いまして、どうふうにお考えになっていますか。

(伊地知) グローバリゼーションというのは、NGO やリベラルの人たちがそういうのですが、相当多彩なのです。理由は、例えばナイキという会社が、グローバリゼーションの名を借りて、いろいろな後進国のマーケットを開けさせて奴隷のような給料で子供たちを使って、いい製品を作っては高い値段でアメリカで売っていると非難されたりとか。

要するにグローバリゼーションというのは、奴隷化ではないかと。それから、環境の法律がない所に持って行って、汚染をジャンジャンやる。そこでできた品物を先進国に持って行って売って、ものすごい利益を得ている。ですから、グローバリゼーションというのは忌み嫌うべきことであるというのが一般的な考え方でした。

スティングリッツは、もう少しソフィスティケートな言い方で、グローバリゼーションというのは実はそんなものではないのだ、もっとアメリカ一辺倒の考えではないグローバルゼーションもあるのだということを、いろいろな例を引きながら言っていました。

もう一つは、今おっしゃっていた本は、彼はIMFと対立したのです。彼は世界銀行の

チーフエコノミストでしたから何度か会議でお会いしましたが、非常に優秀な人で、人柄のいい人です。IMF と対立して、IMF は、簡単に言えば金太郎飴のようにアメリカ的なグローバリゼーションがいいということをやっていたから、非常に対立して、彼は最終的には、それが本当かどうか知りませんが、不満を抱えたまま、世銀を3年半くらいで辞めてしまいました。

例えば、グローバリゼーションは2002年にシアトルで WTO の会議があったときに、デモがたくさん来て会議をつぶしてしまったのです。あの当時は、学生などが相当、グローバリゼーションというのは資本主義化、搾取だということで反対していたのですが、今や2005年になってみると、あの動きは全く陰を潜めてしまいました。

というのは、グローバリゼーションのいいところ、つまり例えば民主主義もグローバリゼーションの一種なわけです。女性の地位を向上させるというのもグローバリゼーションの一要素だったわけです。それから、奴隷のような児童労働、それからロシアや東欧の女性を奴隷のようにヒューマン・トラフィックで持って行って売春を強制するといったことをグローバリゼーションで法律で止められます。

日本がいい例です。日本は、フィリピンからダンシングクラブなどを持ってきて売春させて、あまり法律で縛っていないということで批判されましたが、あれもグローバリゼーションの一種です。そういうことをやってはいけないと。そこで、遅まきながら日本の法律制度も変わって、ああいうものに対する罰則は強化されていますから、グローバリゼーションというのは一概に、いわゆる歴史的左翼の NGO なんかが言っているような形のものではありません。

ですから、おっしゃったように、スティングリッツは、いろいろなやり方があって、最終的には取れんして行って、例えば民主主義や選挙など、いろいろなやり方でいい方向に持っていくのがグローバリゼーションなのだというのを言ったのに、ブッシュ政権などの連中が、あいつは自分たちの施策とは違う、要するにアメリカがいちばんいいのだというのです。アメリカと一緒にするのが我々の仕事なのだというのをブッシュ政権はしきりに言っていますから、そこで対立して辞めざるをえなくなった。それが原因かどうか知りませんが、彼はほかにもいろいろ不満を持っていましたから。世銀を辞めてからすぐにノーベル賞をもらったのです。我々スティングリッツを支持していた人間は、ああよかったと思いました。まだ50代で若いです。数学をやった人ですから、彼の論文は難しく、我々の年代では分かりません。

話が飛びますが、数学といえば、私のオックスフォードの先生はジョン・ヒックスでした。有名な経済学者で、第2回めのノーベル賞をもらった人です。私は第1学位を法律で取ったものですから、経済はよく分からないで留学したのですが、さすがにヒックスの名前は知っていましたから、自分の先生がヒックスだと言われたときには、その日の晩飯の席で前に座っているおばあさんに、「ヒックスが先生になってびっくりした。あんな有名

な先生が生きているとは思わなかった。ニュートンと同じぐらいに死んでいると思っていた」と言うと、それがヒックスの奥さんで、えらく恥をかきました。

(Q) 英語はどのようにして勉強して身に着けられたのですか。

(伊地知) 我々の年代は、ドイツ語でした。今は考えられないと思いますが、我々の年代はドイツ語のほうが高級だと思われていたのです。英語を勉強するのにいちばんいいのは、文章をそのまま丸暗記して、日本語と一緒に完全に暗唱できるようにすることです。

古い本で、私が高校時代に使った本で、まだ版化されていますから、とてもいい本だと思います。佐々木高政という人が『和文英訳の修行』という本を書いています。もう何十年も前の本ですが、いまだに和文英訳では標準的なものです。大変難しく高級な本ですが、私がそれで英語を勉強してもものすごく実力がついたと思っています。最初に標準的ないろいろな動詞や名詞の使い方を列挙した500題の例文が日本語と英語で出ています。それを電車の中やバスの中で、ばかみたいに暗記したのです。あれで英語の基礎ができたのだと思います。

ですから、私は英語を勉強しようとしている人に、いつもそれを薦めています。佐々木高政さんの大ファンになっています。別に金をもらっているわけではありません。本当にいい本です。500題、例文のいいものが出ていますから、その意味が分かろうが何だろうが、日本語の意味も出ていますが、ばかみたいに暗記していると、そのうちに英語が出るようになってきます。文法も大事ですが、私は文法をまずやって、それから例文をやるといいと思います。語学は暗記だと思います。しかも単語ではなく、文章の暗記だと思います。それをやっていると自然に出てくるようになります。

それから、外国人と話すのが恥ずかしいと、逃げるのはだめです。何度かそれを口に出してみると通じますから、物怖じしないで頑張ってください。

(Q) ありがとうございました。

(一同) ありがとうございました(拍手)。